

歌に触れる

遊 縁 の 衆 (人生を数倍楽しむ会)

平成二十四年七月二十八日(第十四回)

(佐藤 紀之)

上山北中の四季を詠った短歌から(校長便り「日々新た」より)

放課後の教室いちめんに応援・感謝の言葉が踊る

北中の子ら全員で手をつなぎグラウンドに咲く大輪の華

歌ったび少しずつだが見えてくるみんなが合わせる心のピント

降る雨が心を洗うにまだ足りぬ少し一人にさせて欲しいな

静かなる海の隣に静かなる生活のない日常がある

遙か海戻りし波の砂の跡夢のかけらが埋もれている

二十名余りもの靴揃いたるかかどが誇る駅伝生徒

ふるさとのよき口々に伝えつつ手渡すパンフに学生の笑み

三日間職場に染まり見えてくる自分と社会がつながるピント

耳の奥消えはしないよ僕の名を叫んで応援せし皆の声

(黒沼 貞志)

誰そ彼がたそがれとなる万葉の世界にひとりひとりを憶えり

落ちてなおわたしはこころよと冬椿寺の庭先陽だまりの中

壁一面つめつくしたる春の薔薇主に代わりて客もてなさん

落ち葉から顔を覗かせ匂い立つ気品も醸すかたくりの花

蔵王の老舗旅館にて詠みし三首

露天の湯すだれの先に石鳥居老舗の宿の心憎さよ

散策でくぐりし鳥居すだれ越し露天の風呂にこころ放ちて

朝まだき瀬音くわわる露天風呂五感も解れこころ風く時間

城址の桜で詠みし五首

出番前朝礼受けて引き締めり今日もいちにち桜に明けん

想い込め桜をバックにこの一枚それを切り撮るわれこころあり

花の春飼主伴つ散歩道桜が取り持つ出会いの季節

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

八一モ二カ桜の舞台整いて世相を映す老老慰問

好晴に主役脇役出会いあり桜に問ふや偕老の春

夏まじかの山あいにて詠みし二首

夏ちかし妻と連れ立つ山あいのペンション村は主婦にあふれて

夏ちかし山並み白雲菜の畑墓石たたずむ薫風の中

初夏の山あいにて詠みし五首

祭りへと歩み揃えし親子づれすがしき初夏の山あいの道

親子連れ花に囲まれ高原の初夏の一日想いでつくり

三重の薔薇のアーチにつれを置きこれが幸かゆたとひとり吟く

木漏れ日がいざなう小道その先の休みどころにひとの気配なく

昼深し若やく夏にひと休み手入れの庭に主の気配

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)